

第Ⅳ部門 ライトアップによるキャンパス空間の夜景演出に関する研究

近畿大学理工学部 社会環境工学科 学生員 ○南 里奈
 近畿大学理工学部 社会環境工学科 正会員 岡田 昌彰

1. 研究の背景と目的

今日の夜間における都市照明において、単に明るさや照明効率の観点だけではなく、快適な夜景演出の計画が望まれている。大学キャンパスにおいてもクリスマスイルミネーションやライトアップによる演出が学生の憩いの場づくりや地域住民にも楽しめる空間づくり、大学のイメージアップを目的に実施されている。本研究では、近畿大学東大阪キャンパス内を対象とし、複数のライトアッププロジェクトを実施した。演出された景観に対しユーザーの抱いた印象および評価を把握することで、キャンパス空間の積極的なアピール手段としてのライトアップ事業の有効性を指摘することを目的とした。

2. 夜景演出の概要

都市部においては、塔、橋梁、主要な建築物、寺院、水辺、自然など、地域の象徴的な対象がライトアップされている。“魅力的な景観づくり”を目的としたものが多く見られ、一過的なイベントにおいて特に有効なインパクト手段として適用されることが多い。

3. ライトアップデザイン提案の意図

本研究の対象地とした近畿大学本部キャンパスにおいては、夜間の現空間に対し「殺風景」「暗い」「寂しい」といった意見があり、そこで感じられる雰囲気や感性を考慮した空間づくりが必ずしも十分に実現しているとは言えない状況にあった。そこで本研究では、正門（西門）、建築に囲まれた人工的空間、樹木の施された芝生広場、ランドマーク的存在の時計台といった異なる性質の対象4ヵ所を選定し、投光、発光、透過光といった様々な照明手法を援用し夜景演出を行った(図-1)。

(1) 正門（西門）

夜間の正門（西門）は近大通り商店街の明るさとは対照的に暗く、特徴的な形態が殆ど視認できない状況にある。そこで、西門アーチ部分の特徴的な形態の強調を試み、投光により陰影を顕在化するデザインを施した。日常的に7学部の学生や大学職員が無意識に通過する場所である西門を7色のライトで色彩変化させ、視覚的な意識化を試みた(図-2)。

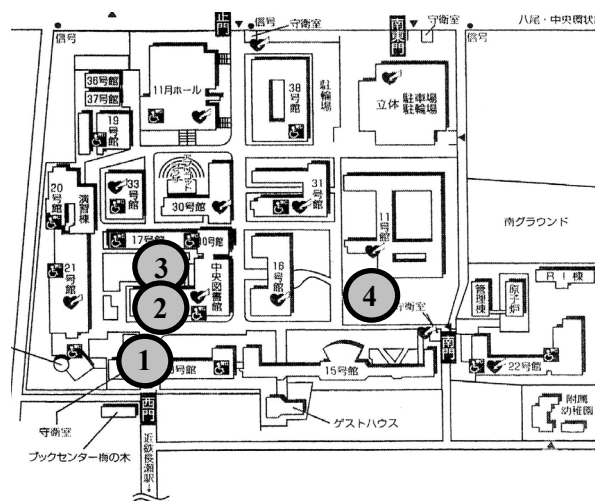


図-1 夜景演出の実施箇所

1:正門（西門）、2:時計台、
 3:建築に囲まれた空間、4:芝生広場



図-2 ライトアップされた西門

(2) 本館時計台

大学キャンパスにおいて時計台をランドマーク的存在として位置づける事例が数多くある。本研究対象地においても特徴的なデザインをもつ時計台が存在しているが、高層の建築群が密集する当キャンパスでは大きな仰角をもって視認することがきわめて困難であるほか、夜間は照明すら施されておらずその存在を確認することが殆どできない状況にあった。一方で、この時計は時刻のズレが地域住民に指摘されるほど地域住民の生活には密着しているものであることが確認され、その存在感を引き立たせることには地域的意義があるものと考えられた。そこで、夜間においては本来の“時計”としての機能とともにその存在感の復

活を試み、時計台上部の照射を実施した。ケーブルは長期の直射日光に弱く耐久性には課題があるが、短期間の実験に際しては耐久性・構造ともに問題ないことを確認した上で、1基 500W のハロゲン投光器4基を用い、長さ約2mの鋼製ハンガーレールのアーム4本によってこれを支持させ、アングルとともにこれを時計台躯体にボルト接合させた(図-3)。

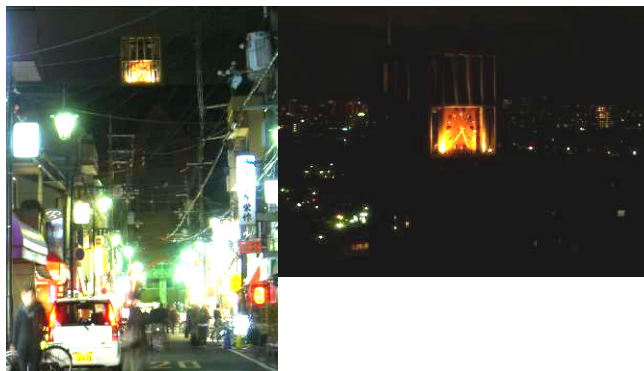


図-3 ライトアップされた時計台

(3) 芝生広場

11号館前の芝生広場は、キャンパス内では開放感のある希少な空間であり、周囲に施された照明灯によって樹木のシルエットが芝生に明快に現れるなど視覚的にも特徴的な場所となっている。ここでは、この“樹木の輪郭シルエット”の境界部を発光ダイオードによる“ゆらめく光源群”によりトレースし、自然現象のもつ「ランダムさ」をモチーフとしたデザインを施した(図-4)。

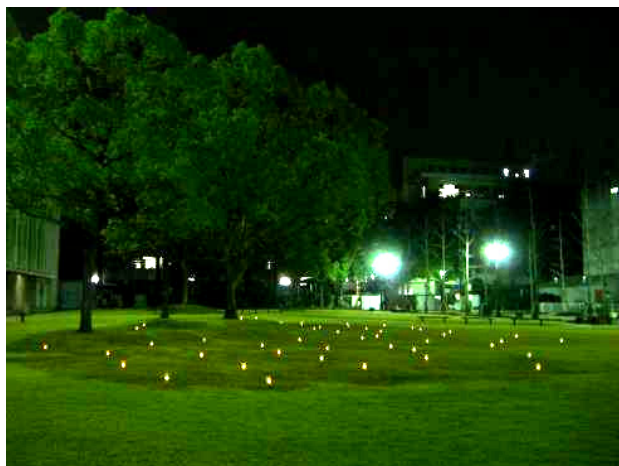


図-4 ライトアップされた11号館前芝生

(4) 図書館

図書館を含む3建築群に囲繞された空間が存在し、図性を伴うも比較的大きなD/Hが取れる空間がある。6層の図書館書庫に施された6行12列計72個の同面積をもつ窓からの透過光に対する着色を工夫することで、虹のような規則的な光の演出を実施した。

4. 鑑賞者による評価

夜景演出による印象を把握すべく、キャンパスユーザーである近畿大学の学生および職員に対し、ライトアップされた空間を実際に体感してもらい、現地にて評価を尋ねた。時計台は視距離約230m地点の近大通りから眺めてもらい、46名から71回答が得られた。「良い」や「きれい」、「幻想的」のような叙情的印象が35%見られたのに対し、「時計が見やすい」や「目立つ」「浮遊感」のような叙景的印象が65%を占めた(図-5)。純粋にライトアップされた新鮮な景観に対する評価に加え、「時計」という本来の機能が再認識されていることがわかる。

また、「癒される」「おもしろい」という叙情的印象に加え、暗い夜のキャンパスのもつ負のイメージの克服や、大学キャンパスそのものの美化というという観点から本事業を強く支持する意見が得られた。また、大学のイメージアップやランドマーク強調による地域住民の印象向上を期待する意見も得られた。

時計台に関しては、近大通り商店街の地域住民に留め置きアンケートおよびヒアリング調査を実施した。地域住民からは、時計自体の視認性向上や安らぎ感生成などの評価とともに「常時点灯すべき」という要望意見が得られた。また、「長瀬地区のランドマーク」としての時計台の新たな役割を期待する意見や、大学と地域住民との結びつきの強化をイメージする意見も得られたことから、地域貢献手段の一つとして夜景演出に一定の効果が期待できるものと考えられる。

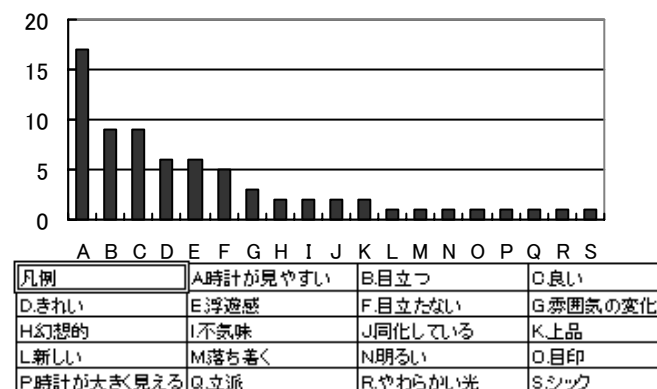


図-5 学生のライトアップされた時計台に対する印象

【参考文献】

- 1) 景観照明の手引き：社団法人照明学会編，コロナ社，1995
- 2) 照明デザイン入門：中島龍興，近田玲子，面出薫，彰国社，1995
- 3) 武蔵工業大学小林茂雄研究室公式HP：
<http://kobayashilab.net/> (2008年3月現在)